

きいしのやうに御身にあて、もち給へりけるがぬるくなればちいさきをばひとつづ、おほきなるをば中よりわりて、御車ぞひになげとらせ給ひける、あまりなる御よういなりかし。
 〔枕草子四〕しきの御ざうしにおはしますごろ○中略老たるほふしの○申略さるのさまにていふなりけり○中略などかこと物もたべざらん、それがさふらはねばこそとり申侍れといへば、くだものひろきもちひなどを、ものにとりいれてとらせたるに、むげに中よくなりて、よろづの事をかたる、

〔古今著聞集十八飲食〕醍醐大僧正實賢もちをやきてくひけるに、きはめたるねぶり人にて、もちを持ながらふらくとねぶりけるに、まへに江次郎といふ格近者の有けるが、僧正のねぶりてうなづぐを、われに此もちくえとけしき有ぞと心得て、はしりよりて手に持たるもちを、取てくいてけり、僧正おどろきて後、こゝに持たりつるもちはと尋られければ、江次郎、其もちははやくへと候つれば、たべ候ぬとこたへける、僧正比興の事なりとて、しよにんにかたりて、わらひけるとぞ、
 〔親俊日記〕天文十一年八月十八日丙申、若狭御寮より鳥子百枚給之、霜月八日甲寅、一蟠根寺恒例餅百到來之、

〔雨窓閑話〕小野木家妻女井かちんの事

一細川幽齋侯の和歌の門人に、小野木縫殿助言郷といふ人あり○中略縫殿助小身なる上に、貧窮いはんかたなし、或日和歌の會を催す○中略亭主縫殿助の云ひけるは、愚妻儀も、御會に連り申しほ度き由申すに付き、如シ玄つらひて、翠簾の内に罷り在り候、あはれ御連中に加へられ給はれかしと申しける、程なく歌始りて、食事時分に至りしかば、年の頃四十許の女、さもけなげなるが、翠簾の外に手をつかへ、今日の御客來に饗應奉るべき品なし、如何はからひ申さんと有りしに、妻女とりあへず、短冊に歌を書きて出だされけり、折節春雨の降りければ、